

# 校内LANを活用した「道德の時間」合理化の試み<sup>†</sup> —中学校道德部における「授業積み重ねシート」の蓄積と共有化—

紺野 祐\*

秋田大学教育文化学部

石田 淳也\*\*

秋田大学教育文化学部附属中学校

本稿は、秋田大学教育文化学部附属中学校における、道德の時間の計画・実施に関する合理化の取り組みの事例を検討する。附中では、道德部の教員を中心としながら、校内での道德の授業実践を通じて得られた諸資料を、校内LANを活用することで蓄積し共有しようとして取り組んでいる。そしてこの取り組みにより、学校全体でより道德の時間の授業改善を図ろうとすることが、結果的には授業に関わる各教員の負担の軽減にもつながろうとしている。附中のこのような特徴ある取り組みからは、現在の学校において道德の時間を構築するための技術論的・方法論的な合理化の一方策が見出されるはずである。

**キーワード：**道德の時間、道德教育、授業改善、授業の合理的な計画と実施、校内LAN

## はじめに：問題の所在と本稿の目的

昭和33年度、戦後の新しい教育体制のもとで十数年間実施されてきた全面主義道德教育の方針が一部改められ、小・中学校のカリキュラムに「道德の時間」が特設された。学校における教育活動すべてを通じて行われる道德教育を補充・深化・統合し、計画的・発展的な指導を行う科目が期待された結果であった。しかし道德の時間は「教科」とはされず、道德教育に専門の免許状も設定されなかった（周知のように現在もそのままである）。というのは、そもそも道德の時間を特設した時点では、道德の時間を当該学級の担任教員に指導させることに積極的な意義を認めていたからである。当時の「文部省通達」（昭和33年3月18日）では、この事情が次のように

説明されている。

道德の時間における指導は、学級を担任する教師が行うものとする。これは児童、生徒の実態を最もよく理解しているということ、道德教育を全教師の関心のもとにおくということ、また道德教育には、つねに教師と児童、生徒がともに人格の完成を目指して進むという態度がきわめてたいせつであるということなどによるものである。（海後・清水編 1966, 173）

かくして現在の公立小・中学校では、教員がある学級の担任になるということは、同時にとりもなおさず当該学級における道德の時間を担当することを意味している。教員はそれぞれに担任する学級の児童・生徒に日頃から密に接触することを通じて、当の児童・生徒と学級を十分に理解し、そのうえで児童・生徒およびその学級にとってもっともふさわしい道德の時間を作りあげることができると考えられている。また小・中学校のほぼすべての教員にとって、みずからが担任する学級における道德の時間上の結びつきから、たしかに道德教育に対する関心が

2011年2月15日受理

<sup>†</sup>Rationalization of 'The Class Moral Education' by using Schoolwide LAN: Accumulation and the sharing 'Pile-up sheet' in the Junior High School

\*Yu KONNO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

\*\*Jun-ya ISHIDA, Junior High School Attached to Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

否応なく引き起こされることも期待される。

ただし現行の道德の時間の実施システムには、以上とは異なるネガティブな側面も指摘できる。たとえば小・中学校の教員養成の課程では、学生の誰もが道德教育について学ぶ一方で、道德教育の免許状が設定されているわけではない。このことにより、道德を専門とし、結果的には所属学校における道德教育のリーダーとなりうるような教員が育つことはきわめてまれである。また道德の時間は、「学校教育法施行規則」上、週1時間・年間35時間の実施と定められている。したがって道德の時間については、とくに教科担任制をとる中学校において教員が専門の免許状を有する教科の場合とは異なり、同一内容を複数学級で実践し、質を上げていくこともできない。（教科担任制をとる小学校高学年でも同様の事情が考えられる。）すなわち道德の時間は、担当する教員のほとんどが専門家とはいえない授業<sup>(1)</sup>を、つねに一回限りで実施してゆくという特質をもたざるをえない。

まして現在の社会情勢においては、学校教育に対して世間からの学力向上への関心が高まる一方である。そしてこの事情も理由となつてか、学校教員の日常業務の多忙化が指摘されてもいる。とするとこうした状況では、教員たちが道德の時間に対してネガティブな関心をもちかねないことも事実であろう。小・中学校で学級を担当するすべての教員が、その専門性を意識することの少ない授業を、週に1時間・年間35時間、毎回新しい内容として取り組まなければならないからである。あるいはたとえ道德教育、とりわけ道德の時間の重要性を認識し、また学級を担当する中でその価値を理解しているとしても、多忙な業務の中で道德の時間を思うように実施できていない教員も少なくないかもしれない。その結果、全教員が各自で関心をもって取り組むことを期待された道德教育、とくに道德の時間が、社会情勢や学校教育システムの変化によっていまや骨抜きにされようとしている。「教育再生会議」（平成18～20年）が危惧していたのは、道德の時間をめぐるこうした現実であったといえる。

おそらく現在の学校における道德の時間では、道德の時間を教員個人の力量と努力に全面的に委任し、もっぱら各々の授業をより意義と裏づけのあるものたらしめる方略だけを求めることには限界がある<sup>(2)</sup>。それゆえ道德の時間についてより実効的な実

施方略が検討されなければならないとするならば、その場合には当の方略は、上述したような学校教員をめぐる現在の諸状況を適切に踏まえたうえで構築されることが必要になるはずである。つまり現在の学校教育で道德の時間をより実効的なものとするためには、一方で道德教育としての組織性・計画性・発展性を重視するとともに、他方では教員個々の負担をできるかぎり小さくすることを考慮しなければならない。とすると、道德の時間の実施を検討するにあたっては、教員やその授業の個性性・閉鎖性のある程度脱却しながら、教員たちの（授業の）あいだで可能なかぎり共有できる知やスキルを探っていかなければならないことになるはずである。

かくして本稿が検討したいのは、秋田大学教育文化学部附属中学校（以下「附中」と略記）における、道德の時間に関するそうした実効的な取り組みの事例である。附中ではこれまで、道德部の教員を中心としながら、道德教育の充実に取り組んできた。そしてその中で、道德の時間という授業の合理的な計画と実施のために、校内での道德の授業実践を通じて得られた資源、すなわち生徒たちの反応・教員自身による「振り返り」等の諸資料を、校内のコンピュータ・ネットワーク（校内LAN）を活用することで蓄積し共有しようと取り組んでいる。そしてこの日常的な取り組みにより、学校全体でより客観的な妥当性が認められる道德の時間の実現を図ろうとすることが、結果的には授業に関わる各教員の負担の軽減にもつながろうとしている。各教員個人の知恵と力量および努力をできるだけ結集し、それを校内で蓄積・共有化することにより、現代社会が学校教育に課している要請をそれとして受け止めたうえで、より意義のある、そしてより効率的な道德の授業の実践が模索されているのである。そこで本稿は、以上のような特徴ある取り組みを進めてきている附中の試みをひとつのモデルケースとして、現在の学校において道德の時間を構築するための技術論的・方法論的な検討を行いたい。

以下では、附中の道德教育において、上記のような道德の時間に関する取り組みが設定されるにいたった背景をまとめ（1節）、その実践の具体的な構成を検討し（2節）、その評価を適切に行うとともに、今後の発展に寄与する課題について掘り下げる（3節）。以上を通じて、今日の学校教育をめぐる状況において、学校単位で取り組みが可能な、道

徳の時間の合理化に関する一定程度の知見が得られるにちがいない。

## 1. 道徳の時間の充実化：取り組み開始の経緯

### (1) 教員による「振り返り」蓄積活動の実施

附中全体における平成21・22年の研究主題は「開かれた個の学びの構築」であり、研究副主題が「問いを練り上げ、問い直しを促す指導を問う」である。具体的には、授業における生徒による初発の「問い」とそれをさらに深める「問い直し」のあり方を主な課題として、各教科・領域での研究を進めている。そして附中道徳部（各学年2名・計6名の教員による構成）では、こうした全校の研究主題を受け、研究主題を「共に考え、共に悩み、よりよい生き方を求めようとする力をはぐくむ指導」に設定した。

ここで、附中道徳部の現在の研究主題が、全校の研究主題である「問い」と「問い直し」にどのように結びついているかについて触れておきたい。そもそも道徳の普遍的な課題である「よりよく生きていく」（村井 1967, 15）このためには、生徒たちが多様な視点のもと、道徳の諸問題について深く考え悩みながら、過去の自分を省みていくことが重要であろう。つまり「よりよく生きていく」ことは、生徒たちが自分自身のあり方と行動を問い、また問い直していくことに直結しているはずである。そこで道徳部では、平成18年度より、生徒たちが道徳の時

間における学習で書く「振り返りシート」（下の【資料1】を参照）を、3年間を通じたポートフォリオとして各自「道徳ファイル」に蓄積することにより、過去の自分自身を省みる「問い」の機会を意図的に設定したり、省みる場面から新たな「問い直し」を練り上げたりすることができる学習体制を整えた。学習上のこうしたフィードバックを継続することで、道徳の時間に口頭で意見発表する機会がなかった生徒でも、発表するという形とは別の形で授業を作り上げているという満足感や自己存在感を味わうことができると考えてのことである。

以上で概観したように、附中の現在の研究主題である「問い」と「問い直し」のシステムは、もちろん生徒の学習における視点から構成されている。ただこのシステムは、さらに教師の学習指導に向けた「問い」と「問い直し」に直結する視点を提供することになる。以下では、このような見方が確立し、道徳部が現時点で試行している教師の「問い」と「問い直し」に至る経緯について述べたい。

まず第一段階として、先述の通り、平成18年度に始まり現在も引き続き行われている、生徒の道徳の時間の振り返りをポートフォリオとして「道徳ファイル」に蓄積する活動が挙げられる。このような教員によるみずからの道徳の時間の準備、実施およびフォローという一連の流れは、道徳の時間の授業実践に向けられる、「問い」のひとつの姿であると考え

#### 【資料1】

### 道 徳 振 り 返 り シ ー ト

月 日

組 番 氏名

自分に向き合い、自らを高めようとするについて考えることができた。

☐ もっと深めたい

☐ 深く考えた

☐ 満足できる

影響を受けた  
友だちの意見や考  
え方

授業の中で  
・感じたこと  
・考えたこと  
・ゆれ動いたわたし  
の考え

えることができるだろう。(この取り組みは現在も道徳の時間を担当する全学級担任によって実践されている。)

また第二段階として、生徒が道徳の時間の終末で書いた「振り返りシート」の内容を授業者がピックアップしてB5版のプリント1枚にまとめ(当該道徳の時間に発表する機会がなかった生徒を中心に行う)、次時以降の道徳の時間にフィードバックすることが挙げられる。この活動は、学級担任12名のうち道徳部に所属する6名の教員を中心に、平成21年度から実施されている。これも授業者からすると、みずからの授業実践への「問い」の一部でありうる。

そして、以上の取り組みと同時進行のかたちで、第三段階の試みが試行されている。すなわち、各教員がみずからの道徳の時間の授業実践について「振り返り」をまとめ、それを道徳部の手で校内LANに蓄積・共有化するという取り組みである。これは平成20年度より努めている道徳主任が提案したものであるが、その背景には教員も生徒たちとともに考え、ともに悩みながら道徳の時間を作り上げていくことが(これは道徳部平成22年度の研究主題と合致する)、教員自身がみずからの授業実践に対して「問い直し」を行うことにつながる、との論理があった。この提案は道徳部において承認され、やはり道徳部に所属する6名の教員が自身の授業実践についての「振り返り」を蓄積している現在である。

すなわち平成22年度の道徳部において目指されたのは、さまざまな手法を駆使し、フォローまで含んだ授業が教員による生徒たちへの問いかけ＝「問い」とするならば、そうした問いかけ＝「問い」と同時進行で行われる、その問いの意味や意義、あるいは成果を教員みずからが新たな視点のもとで冷静に・虚心坦懐に省みる過程＝「問い直し」なのである。ここで注目したいのは、教員が自身の授業について「振り返り」を蓄積する活動が、こうした教員の授業実践それ自体に対する真摯な「問い」および「問い直し」の結果であることである。つまり以上の取り組みは、道徳の時間の一般的なねらいが生徒たちに「よりよく生きていく」ことを考させることであるとすれば、その道徳の時間を「よりよく」したいという、教員の授業改善に対する純粋な意欲からのみ生じてきたというべきである。

## (2) 道徳の時間の充実化と校内LANの活用の経緯

以上に述べた教員による自身の授業実践に対する「振り返り」の蓄積について、内容に関しては本稿2.で詳述するとして、ここではあらかじめその活動の方法論的な成立要件に言及しておきたい。教員によるみずからの授業実践の「振り返り」が、基本的には校内LAN上に電子記録として蓄積され、誰もが閲覧・プリントアウトなどができるように共有化されているシステムについてである<sup>(3)</sup>。

国は21世紀に本格的に要請される高度情報通信ネットワーク社会の形成を目指し、「e-Japan重点計画」(平成14～17年)を策定・実施した。(この施策は現在「IT政策パッケージ-2005-世界最先端のIT国家の実現に向けて」に移行している。)この「e-Japan重点計画」における5つの重点政策のひとつが、「教育及び学習の振興並びに人材の育成」(内閣官房・IT戦略本部2001)であった。公立小中高等学校等ではこの方針に基づき、高速インターネットへの常時接続、またIT授業を行う「新世代型学習空間」の実現が目指されるとともに、校内LANの整備も進められた。附中の校内LANも、以上の国の施策を受けて成立したものである。

さて、そもそも国が公立学校に校内LANを整備することによりねらっていたのは、文部科学省(2010)の「教育の情報化に関する手引」によれば、もっぱら「校務の情報化の推進」であったと考えられる。その活用法も実際多岐にわたるが、校務に使用する文書のデータベース化や児童・生徒の成績処理等により、業務を効率化して教員の負担を軽減することで、学校全体における教育活動の質の改善が意図されている。

ただその一方で、各学校は校内LANを児童・生徒に対する教科指導と密接に関連した活動に活かすことも可能である。附中道徳部は平成15～17年度に、校内LANにおいてひとつの取り組みを実施している。これは、教員が道徳の時間を通じた各生徒の道徳的価値の深まりを判断し、その評価を1～4の数字でレーダーチャート形式に記録するものであった。そのために、附中校内LANに設置された研究部のフォルダ内に道徳部のフォルダが作成され、レーダーチャート式の「評価シート」ファイルのフォーマット、および記入済の評価シートが納められていた。この取り組みは道徳の時間における評価と指導の研究として行われたものであり、その点

からもこの場合関係教員により諸情報を蓄積・共有し、また自由にダウンロード・アップロードが可能な校内LANの活用がもっとも望ましかったのである。

しかし平成18年、附中道德部は道德の時間における生徒の学習の評価・指導をレーダーチャート形式のシートで行う試みを取りやめた。平成17年度までの評価記録の蓄積が生徒への指導に活かされていたのか、またそもそも道德の時間における生徒の評価を数値で行っているのかといった疑問が解消できなかったからである。このような事情から、道德の時間での授業実践に関わる校内LANの活用は、平成18年から同20年まで途絶えることとなった。

そうした中、新しい研究主題が設定された平成21年度からは、附中道德部は校内LANを新たな目的のもとに活用することになった。それが、道德の時間の「振り返り」を、生徒の学習および教員の授業実践の両面にわたって校内LANに蓄積・共有化する取り組みである。

平成20年度以前の附中道德部においては、教員による自身の授業についての「振り返り」蓄積活動に類似した実践は皆無であった。ただしまったく別の趣旨であっても、かつて道德部において校内LANを授業実践・研究に活用するという方法論的な取り組みがなければ、現在行われている教員による自身の授業の「振り返り」蓄積活動も発生・定着しなかったかもしれない。その意味では、現在の「振り返り」蓄積活動にとって、附中とくに道德部において授業実践・研究と校内LANとの関連づけがすでに成立していたことは幸いであったというべきであろう。

## 2. 取り組みの構成

### (1)「授業積み重ねシート」の構成

教員がみずから実践した授業についてまとめ、校内LAN上で蓄積・共有されている「振り返り」であるが、これは現在のところ、「授業積み重ねシート」というフォーマットを使用して行われている（次頁の【資料2】を参照）。

この資料2からもわかるように、当該シートは現在のところ、①「授業実施学級」、②「扱った資料名」、③「授業実施月日」、④「授業における主発問」、⑤「生徒からの意見・考え」、そして⑥「教師による所感」といった項目を主として構成されている。以下では、授業積み重ねシートの記入手続きを提示する。

授業実施後、まずは①授業実施学級、および③授業実施日を記入する。授業実施日覧の下備考欄には、授業を実施した学級および月日に関してとくに考慮すべき事情等を記入することができる。

次に、実施した授業に関する基本情報として、②扱った資料名、および④授業における主発問を記入する。附中では、道德の時間の「年間指導計画」に「資料名」はもとより「主発問」まで記載している。通常はこれらをそのまま記入することになるが、道德部で授業展開が練り直された場合には、年間指導計画のものから修正された「主発問」となる場合もある。そうした変更等の情報については、前述の備考欄に記録する。

そして、④の主発問に関連して寄せられた⑤生徒からの意見・考えについて、その主立ったものを記入する。これは、先述した生徒用の「振り返りシート」（【資料1】）にある「授業の中で感じたこと、考えたこと、ゆれ動いたわたしの考え」の欄からの転記となる。生徒たちの意見等についても特記すべき事項があれば、それを同欄右の備考欄に記入する。

さらに、以上の⑤生徒たちから寄せられた意見・考えをもとに、教員は⑥教師による所感をまとめる。「教師による所感」の内容は、現時点では当該授業に関する反省が主となっている。

さて、形式的な事項は別として、附中道德部がシート作成および蓄積の上でとくに重視したかったのは、④授業における主発問と⑥生徒からの意見・考えである。というのも道德部としては、(ア)生徒による当該道德の時間の「振り返り」が「主発問」と密接に関連しているという実態があることが確認され、また(イ)道德の時間における教師の実践を具体的にわかりやすく、かつリアリティが感じられるように記録しておくことが、授業改善上重要であると考えられたからである。いずれにしても「授業積み重ねシート」の作成・運用の取り組みが、生徒たちの学習のために道德の時間の授業実践をよりよくしていこうとする、教員自身によるみずからの授業に対する「問い直し」、つまり道德の時間の授業改善を第一の目的としていたことはここでも明記されるべきである。

### (2)「授業積み重ねシート」を軸とした道德の時間・授業改善のフローチャート

前項に述べたような道德の時間「授業積み重ね

## 【資料2】

3年 A組

資料名：二人の弟子		8月25日(水)
主 発 問	○「智行が純白の白百合を見て、涙が止まらなかったのはなぜだろう。」	※備考 夏休み明け初回
生 徒 か ら の 意 見 、 考 え	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分と道信の行いをくらべると、行いは道信の方が悪いけれど、心の中は自分の方が悪いと思ったから。</li> <li>・道信を許すことができなかった自分が悲しかったから。</li> <li>・自分はまじめに頑張っているのに、今さらやってきた道信にいらだっていたことが、上人に認めてもらえず、沈んでいた気持ちの中で咲いていた一輪の純白の白百合を見て、この花と同じように自分も孤独だと気付いたから。</li> <li>・道信はまちがった道に進んだのに、もう一度やり直したいと思うのは、今まで一生懸命修行に励んできた知行にとっては考えられないと思います。また、そう思った自分の心の小ささや醜さを1本でも輝いている白百合に投影したのだと思います。</li> <li>・昔は一緒に頑張ってきた仲だったので、道信を責めた自分をよくないと思ったから。また、道信を責めた自分が汚れていると思ったから。</li> <li>・上人様のように道信を許せない自分と道信を責めてしまった自分に気付いたからだと思います。</li> <li>・心を入れ換え、自分自信を見つめ直して帰ってきた道信を認めてあげられず、相手を責めたり怒りの気持ちをもってしまった自分の醜さが純白の白百合を見たことで、より一層感じられたから。</li> <li>・たとえ道信が途中で逃げ出しても、昔一緒に厳しい修行に励んでいた仲なのに、上人様に道信を受け入れない方がよいと言った自分の心と純白の白百合を比べて悲しくなったから。</li> <li>・上人様のようにきれいでやさしい気持ちで道信を迎えることができない自分が悲しかったから。</li> <li>・自分は一生懸命修行してきたつもりだったけれど、道信の気持ちを理解してあげられなかった自分の心の質しさのようなものを感じたから。</li> <li>・道信をよく思えない自分がいることに気付いて泣いたのだと思う。</li> <li>・道信を責めた自分の心のよくない部分に向き合ったから。</li> </ul>	※備考
所 感	◎反省点 発問は「道信」の視点からと「智行」の視点からに分けて行った。道信の追体験は生徒にとってやさしいので、それをふまえた上で智行の視点にもっていくことが望ましい。しかし、50分の中で展開するのは時間的に厳しいものがあつた。2時間扱いにしてもいいだろう。	

シート」は、各学年2名ずつ・合計6名の道徳部員によって実践されている。この6名の道徳部員は、週1回、時間割に組み込まれた道徳部会をもち、全校で実施される道徳の時間に関する資料提供とともに、前述のような記録を残している。

具体的には、まず第一に、年度当初に定められた年間指導計画と道徳部会での話し合いを受けて、各学年の道徳部員が授業で使用する資料（読み物資料が多い）、生徒向けの「振り返りシート」などを準備し、各学級担任に配布する。なお道徳部では、各学年部会、特別活動部会や生徒指導部会等と連携し、それぞれの学年や学級の生徒の実態およびカリキュラムの実現状況等に即した道徳の時間を計画するこ

ともある。ただしその場合も、資料および「振り返りシート」については通常と同様の取り扱いとなる。

次に、各学級担任による道徳の時間の授業実践が終了した後、道徳部員は当該授業で生徒たちが記入した「振り返りシート」の内容を、B5版のプリント1枚にまとめる。前述のように、この際発表する機会がなかった生徒のものを中心にまとめるよう配慮する。このプリントは、各学級担任に学年全体の生徒の状況としてフィードバックされ、次時の道徳の時間の導入部等で有効に活用できるようにしている。また、必要に応じて生徒たちにも配布することで、他の生徒たちの考え方を知り、生徒自身の学習を充実させる機能を担保する。

そして以上のプロセスとはほぼ同時進行で、授業を実施した道德部の各教員は「授業積み重ねシート」に、自身の授業実践についての記録を作成していく。とくに「生徒からの意見、考え」欄には、道德部員がまとめたB5版のプリントをもとに、可能なかぎり多くの生徒による「振り返り」を記録する。その際、生徒の振り返りの内容は、授業者が設定したねらいに迫ったものだけでなく、ややねらいからずれていると見られるものも記載するように配慮している。また、当該授業において特記すべき事項がある場合には、これを備考欄に記入する。

さらに道德部員は、以上の作業をうけて、「授業積み重ねシート」の「教師による所感」欄に、授業を計画に沿って展開することができた理由やねらいに近づけなかった反省等を記入する。以上で当該授業に関する「授業積み重ねシート」が完成するので、これを校内LAN上の道德部のフォルダにアップロードし、保管する。

以上のプロセスが繰り返されることにより、道德の時間の授業実践記録が蓄積される。

### 3. 「授業積み重ねシート」を軸とした道德の時間の授業改善の成果と課題

#### (1) 成果

##### ①教師のスキルアップ

本稿「はじめに」で述べたとおり、道德の時間は「学校教育法施行規則」により、原則として学級担任が自身の学級のみで授業を行う。これは文字通り、どのような立場教員であれ週1時間・年間35時間を超えた授業実践の機会をもつことができないことを意味する<sup>(4)</sup>。したがって道德の時間は、いわばつねに“一発勝負”の授業実践とならざるをえないのである。教員の道德の時間に関するスキル（および関心）がなかなか向上しないことの要因として、このように教員にとってそもそも道德の時間を指導する機会が少ない現実が挙げられるだろう。だからこそ、授業時数がさわめて限定されている道德の時間においてはとくに、生徒の「振り返り」はもちろん、それと対応した教員の授業実践に対する「振り返り」の記録をも蓄積・共有化し、資源として活用することには意味がある。すなわち教員が、こうした一連の活動を通じて道德の時間に関する「問い直し」の機会を得ることで、自身の実践的な指導力に磨きをかけ、ひいては生徒たちに対するより質の高い道德

の時間を提供することが可能になるはずだからである。

附中における「授業積み重ねシート」を軸とした授業改善の試みは、以上のような見通しのもとに行われてきた。それでは、その取り組みによるスキルアップの成果は、現在どのようなかたちで現れてきているだろうか。ここでは、附中において学校としての組織的・継続的な改善を図ること等のために毎年実施されている、教師による「学校評価」（教員全員が各分掌についてチェックを行う）の平成22年度版を参考資料として、当該「評価」における道德教育全般に対する結果から、「授業積み重ねシート」を軸とした授業改善の成果を検討してみたい。

附中における「学校評価」では、「道德教育」項の評価内容は4つの下位項目に分かれ、それぞれ1（最低）から4（最高）までの点数を集計して平均をとっている。このうち道德の時間に直結する下位項目は3つであるが、道德教育の「全体計画」を中心とする残りの下位項目とあわせると、平成21年度度の評価から0.16ポイント上昇している。ただこの結果とあわせて注目したいのは、自由記述欄での教員たちからの声である。以下に一部抜粋してみたい。

- ・～学校として道德教育を大切にしようとする雰囲気ができている。日々の授業を地道に積み重ねることに今後も取り組んでいきたい。
- ・ここ数年の取り組みには一貫性が感じられ、本校教員にとってもよい勉強の機会となっている。

「授業積み重ねシート」を軸とした授業改善の取り組みは、以上のようにまだかならずしも直接的なスキルアップの効果を生んでいるとはいえない状況にある。ただし道德部を中心としたこれらの取り組みが、附中全体の道德教育としては数字的にも教員の実感としても一定の成果と認められていることの証であると思なしてよいであろう。こうした環境改善の効果を背景として、取り組みの継続によってスキルアップの成果が徐々に現れていくことが期待される。

##### ②合理化

「授業積み重ねシート」を軸とした試みによるもうひとつの成果として、さまざまな種類の記録の蓄積・共有化が、道德の時間の指導における合理化に

つながることについて触れたい。(なおここでいう「合理化 (rationalization)」とは、現代社会において想起しやすい「能率化・効率化」とともに、「(道)理に適ったものとする」という言葉本来の意味でも使用する。)

道德の時間に関連して集められた各種の記録は、校内LANの道德部フォルダに蓄積されていることから、これらは校内の全教員が閲覧、ダウンロードおよびプリントアウトできる状況にある。今後諸記録の蓄積を重ねてゆけば、それ自体道德教育全般に関する共有資源として充実を図ることができるはずである。とりわけ道德の時間の授業実践について、主発問とそれに対する生徒たちの反応、および生徒の反応を受けた授業者自身の「振り返り」の蓄積は、のちに同一の資料を用いて授業を行う教員にとって貴重な共有資源となるにちがいない。

現在のところ、多くの学校で実践されている道德の時間では、教科書会社等が作成したいわゆる副読本を用い、読み物資料を中心に指導が進められる。(附中でも同様である。)そしてそれらの副読本には、通常同一出版社が編集した「指導書」が付属されている。しかし、そうした指導書に例示されている授業展開は、かならずしも特定の地域におかれ特定の文化を背負った学校や、それぞれ異なった背景と性格・行動傾向をもつ多様な生徒たちの実態に合わないことも多い。だからこそ各学校の教員は、道德の時間のそれぞれの実践を、当該学校の道德部で独自に策定した「年間指導計画」に適合させるとともに、目の前の多様な生徒たちの実態を把握したうえで行わなければならないのである。

そうした現実を踏まえると、校内LANを使用して「授業積み重ねシート」を軸とした道德の時間の諸資料を蓄積・共有化することは、当該学校に在籍する特有の地域文化的な背景をもった多様な生徒たちに対して効果的に道德の時間を進めるための、きわめて貴重なヒントのプールとなるはずである。そして共有資源を能率的に活用すること自体、教員の負担の軽減につながるであろう。

また、道德の時間に関連した「授業積み重ねシート」他の諸資料を蓄積・共有化することは、各教員の道德の時間の授業実践をいっそう理に適ったものとするに寄与するはずである。

道德の時間は、先述のように原則として学級担任が自身の学級でのみ実践するため、個人で授業のス

キルアップを果たすことがかなり困難である。そうした道德の時間の授業実践にとって、校内LANに「授業積み重ねシート」を軸とした道德の時間の諸資料が蓄積・共有化されていれば、それらの諸資料=資源を適切に参照することにより、各教員が自身の授業を独善的に構築する危険性を低くすることにもつながるであろう。

もちろん、校内LANに蓄積されている諸種の資料が絶対的な正しさや価値を保証するものではない。とくに「授業積み重ねシート」を参照しながらも、すでに実践された授業について疑問があるのであれば、その場合には修正された、もしくはまったく新たな実践が生まれることもあろう。だがむしろ、こうした事態にこそ諸資料を蓄積し共有化する意味がある。すなわち、ときにまったく新たな視点をもった実践の資料もそれ以前のものと同様に蓄積・共有化されることで、さらに多くの教員による彫琢作業を受け付ける状況になるのである。こうして多くの実践が、時間とともにそれらの資源としての妥当性・価値を高められることになるはずである。「合理化」という視点からすると、道德の時間に関連した「授業積み重ねシート」他の記録の蓄積・共有化することは、個々の教員の枠にとどまりがちな道德の時間の授業実践を、多くの教員たちの目によっていっそう理に適ったものとする活動につながるはずである。

とはいえ、以上のような取り組みを実践していくためには、結局のところ前提として、多くの教員による相互協力と教員どうしの信頼関係といった雰囲気面・情緒面・信条面での要素が重要であることは疑いない。現在の附中職員室では、多くの教員に道德部の取り組みの意図や方向性、その実施方略等が適切に理解されているといえる。(このことは、前述の「学校評価」の結果からも見て取られるであろう。)このような「同僚性」の高さが、つまるところ附中の取り組みにおける前提のひとつであるともいえるよう。

## (2) 課題

### ①多忙さの要因

学校教員の日常業務は、学級経営・教科指導は当然として、校務分掌、部活動の指導、日々の生徒指導やカウンセリング等、年を追うごとに増加しているかに映る。(附中ではこれらにさらに、入試業務



や教育実習生への指導等が加わる。) そうした日常の中で、道徳の時間についての諸資料を記録していくことは、当然ではあるが教員の多忙さに拍車をかけることになる。

附中における取り組みでは、校内LAN上に記録を残す作業自体は実際にはそれほど時間がかかることではない。次時の授業準備の一環としてこれまで行ってきた作業に、多少の追加負担が必要なだけである。この点ではむしろ、教員が自身の実践の意義をより適切に整理することで得られる利益のほうが大きい。それよりも直接的な負担になっているのは、校内で共有資源となりうるような妥当性をもった・価値ある記録として蓄積するために、教員が各自の道徳の時間についてそれなりの準備をして実践にあたらなければならないことのほうかもしれない。

「授業積み重ねシート」他の諸資料を記録していくことは、たしかに短期的に見れば各教員の負担増を引き起こすことは否定できない。物理的に限られた時間の中で道徳の時間だけに特別に配慮することで、その他の教員として大切な業務がおろそかになっては意味がないことも当然である。ただだからこそ、それら蓄積された諸資料が校内の共有資源として相互に効率的に活用できれば、しかも緊張感を伴って妥当性と価値が一定程度保証された信頼できる資料として授業実践に用いることができれば、このことは中・長期的に見るとかならずや教員の負担軽減につながるものであると考えられる。そうであればなお、現在の蓄積・共有化システム自体をより能率よく運用できる方略を検討しつつつけていかなければならないだろう。

## ②蓄積・共有化すべき資料の吟味

現在校内LANに蓄積・共有化している資料は、道徳の時間の授業実践に関する「授業積み重ねシート」が主である。だが蓄積・共有化すべき資料としてこれだけで十分であるのか、また当該シートの形式が現行のもので適切であるのかについては、今後検討をつづけなければならない。

教員の道徳の時間の指導における負担を少しでも軽減するためには、また道徳の時間をより妥当性と価値の備わった実践とするためには、道徳の時間で実際に使用する各種資料を蓄積・共有化することが有効であろう。そのため具体的には、(簡単な)指導案、読み物資料の資料分析、生徒向け配付資料、黒板への掲示物等を蓄積・共有化することを検討し

たい。とくに指導案と資料分析および掲示物は、各教員の指導のスキルアップにとって大きな手助けになると考えられる。

また「授業積み重ねシート」についても、記載すべき事項に見直しが必要とされるかもしれない。とくに現行のシートには資料についての記載があるので、これに「ねらい」および内容項目をあわせて記入し、「主題名」を端的に把握できる形式とする修正を検討したい。

## おわりに：結論的考察と今後の課題

近代の教育学は、たしかに一方で何であれ「どう教えるか」という技術的問いに答える学問、すなわち「教授学 (didactics)」をひとつの柱<sup>5)</sup>として成立したといえよう。コメニウスの『大教授学』(Comenius 1633-38) がその象徴である。コメニウスは、「あらゆる人にあらゆる事柄を教授する普遍的な技法」(Comenius 1633-38, 20) の探索を行った。その内容の当否に関する判断は措くとしても、コメニウスはそうした目的をもつ教授学を探求することによって、「教授する者あるいは学習する者に少しも苦痛や嫌悪の気持を抱かせることがなく、かえってその両方にこの上もない楽しさを感じさせる」(Comenius 1633-38, 20) ことができるとの信念をもっていた。

以上のような目的をもつコメニウスの試みの意義は、現代日本の学校教育を取り巻く諸状況に鑑みると、道徳の時間においても、あるいは道徳の時間においてこそ再確認されるべきである。つまり、生徒＝学習者中心の授業をつくることは当然であるが、同時に授業者である教員にとっても、週1時間・年間35時間しかない道徳の時間の実践に対して及び腰になることなく、むしろその実践に積極的に・自信をもって取り組むことのできる授業の構築が求められるからである。そしてそのために、道徳の時間に関わる「普遍的な技法」が必要とされているといえるのである。

とはいえ、多くの教員が共有できるような授業実践用の諸資料を集積する取り組みは、これまでも道徳の時間にかぎらず、また公的・民間を問わず積極的に行われてきたといっていよいだろう。そしてその徹底されたかたちを、向山洋一を中心とした「教育技術法則化運動」に見ることができる。向山 (1999) はその運動の基本理念を、「全国の優れた教育技術・

方法を集めて、全国の教師の共有財産にしていく」(86) ことにおいていた。こうした教育技術法則化運動は、道德の時間についても積極的に取り組み、その成果を著作やウェブ等で公開している。

しかし「教育技術法則化」運動のような授業実践のための共有可能な情報リソースの提供は、一步間違えると教育現場に手抜き・その場しのぎの技術論の蔓延を生みかねないのではないかと。こうした危惧は、同運動が始まってからつねに唱えられつづけてきた(『ひと』編集委員会編 1989; 岡崎他 1988)。ことに教員に学習指導上の「実践的指導力」が強く要求されている現代においては、“すぐに役立つ”技術・方法の、いわば理念なき“つまみ食い”が横行しないとともかぎらない。柴田(2010)は、教育技術法則化運動がはらまざるをえないこうした危険性を指摘し、授業が「個々バラバラの手法(発問とか指示)の寄せ集め」であってはならないと説く(219)。

何のための技術であり、手法であるかということ、そんなに軽く考えてよいものだろうか。教育技術は、つねに全体としてそれが何をめざすものであるかが問われねばならず、その目的に照らして個々の手法にどのような意義があるかが評価されるのではないかと。(柴田 2010, 219)

その意味では、前述の「e-Japan 重点計画」にもとづく一連の取り組み、たとえば教育情報ナショナルセンターや各都道府県教育センターのシステム等における指導案等の集約も、同様の危険性を懐胎せざるをえないとも考えられる。むしろそうした取り組みには、教育技術法則化運動に見られるような、提案された教育技術・方法に対して多くの教員が行う検討・吟味＝「検証」の機能がセットされていない。このことからすると、国や地方公共団体が設置・運用する教育情報提供サービスは実施主体側の一方的な情報公開にすぎず、そこに集約される技術・方法もまた結果的に玉石混淆である可能性が高い。これではむしろ、それらのシステムが目的とする授業の改善や効率化とは逆行してしまうであろう。

さらに教育技術法則化運動にせよ e-Japan 重点計画にもとづく学習指導技術・方法のデータベース化にせよ、いずれにしてもその性質からして、活用したい学校・教室に固有の諸状況を勘案しようがない。とすると授業実践において「普遍的」でありうるの

は、実際には細かい技法のみであって、1時間の授業実践の改善は結局のところ、各教員の創意工夫任せになってしまう。こうした事態は、各教員が道德の時間の改善に真摯に向かう態度を後押しするとしても、やはり現代社会の学校で実践される道德の時間に求められるような合理化の実現を支援しうようには見えない。

本稿で検討した附中道德部の取り組みには、以上のような思潮と比較考量することはいっそう、その高い意義と可能性を確認することができる。その意義と可能性は、もっぱら2つの要素から成り立っていると考えられる。ひとつは学校という組織単位で道德の時間の授業改善に対する取り組みが行われていることであり、もうひとつは「合理化」ということばがもつ2つの意味の両立を目指した試みであるということである。

すなわち、附中が自前の校内LANを介して道德の時間に関する諸資料の蓄積・共有化を日常的に進めている取り組みは、「普遍的な」技術・方法を求める際に陥りがちな前述の危険性を、一定程度低減する機能を内蔵しているにちがいない。当該学校の内部に限定される取り組みでは、たしかに全国規模での「追試」といった検証体制、およびそれによって得られる「普遍的な」諸資料を望むことは難しいであろう。しかしその一方で、学校単位での取り組みにおいてこそ、またその場合にのみ、あるひとつの道德の時間についての技術・方法であっても、日頃から顔をあわせ、生徒との対応を行っていることが見える教員どうしの範囲で、当の学校および地域等の実情に即した検討が行われうるのである<sup>6)</sup>。

平成20年に改訂された「学習指導要領」では、校内の道德教育実施体制に「道德教育推進教師」を位置づけることが新たに求められた。その決定の背景には、学校教育、とくに道德教育では、やはり多様な地域文化とそこから通ってくる生徒たちへの配慮が不可欠であることの認識が進んだという事情もある(永田・島 2010)。こうした意味では国もまた、道德教育の充実にとって、教育情報ナショナルセンター等による教育技術の国家的な集約と同時に、各学校という単位でのきめ細やかな取り組みが重要であることを認めてきているのであろう(押谷他 2010)。かくして附中における道德の時間に関する取り組みは、結果的には生徒たちにとっての学習上の利益に*いっそうつながるような授業改善を生み出*

す可能性を秘めた、ひとつの好例にもなりうるものである。

ただし附中の取り組みは、上に述べたような理に適った授業構築を可能とするという意味でのみならず、各教員における道德の時間の準備を効率的・能率的なものとするという意味でも、校内の道德教育における二重の合理化を進めることに寄与するはずである。

すなわち校内LANを使用して道德の時間の授業実践に関する諸資料を集約的に蓄積・共有化するシステムは、もちろん当初は生徒たちの学習に対する配慮から始まった。しかし道德の時間を企図し実践する教員の側から見た場合、この同一の試みが同時に、教員自身にとっても「少しも苦痛や嫌悪の気持ちを抱かせること」がなく、むしろ「この上もない楽しさを感じさせる」(Comenius 1633-38, 20)ものとなる可能性は大いにありそうである。優れた授業実践を校内で共有し、その帰結をもとに同僚である教員どうしでさらにその質を高めてゆくことは、生徒と教員の双方に利益をもたらす。もちろん、そのための短期的な負担は覚悟しなければならないとしても、中・長期的に見れば、校内LANを活用して種々の資料を蓄積することで実現する道德の時間の準備の効率化・能率化は、ますます多忙化している教員の日常業務において見逃すことのできない意味をもっているはずである(文部科学省 2010)。

とはいえ、附中道德部における校内LANを活用した道德の時間の合理化の取り組みは、実際には緒についたばかりである。その取り組みはまだほぼ道德部に所属する教員に限定されており、全校規模で定着しているわけではない。ただだからこそ、今後もこの取り組みに関わる教員に異動がある中で、附中ならではの道德の時間を合理的に実践するシステムがどのように機能しつづけ、また改良されてゆくのか、またそのプロセスにおいて生徒たちの学習および教員の授業準備・実践にどのような変化が現れたか等について、時間をかけて検証・評価してゆく必要があるであろう。校内LANを活用し、「授業積み重ねシート」を蓄積・共有するという道德の時間の日常的な授業改善が、附中全校での取り組みとして実現することを目指しながら、上記の課題については今後も引き続き研究の対象としてゆきたい。

〈了〉

## 【謝辞】

本稿執筆にあたり、秋田大学教育文化学部附属中学校の教員の皆様には有益なご意見・多大なご支援をいただきました。深く感謝いたします。

## 【注】

- (1) たしかに、教員が教育活動を行うかぎり、それはすべて道德教育であるとする論理も成り立ちうる(宇佐美 1987, 10)。だが授業としての道德の時間と他教科のそれとを比較すれば、道德の時間の専門家などほとんどいないことは明らかである。またこのことは、みずからを道德の時間(および道德教育)の専門家と自己認識する教員がほとんど皆無であることを意味する。
- (2) 結局のところ、道德の時間に関する従来の諸研究のほとんどが、教員個人の力量と努力に全面的に依存し、もっぱら各々の授業をより意義と裏づけのあるものたらしめる方略だけを求めていたのであろう。道德の時間をめぐる従来の実践研究は、その多くが特定の資料等を使った個別の授業に関するものか、もしくは授業の基礎となる原理的理論に関するものであった。より広い立場からの研究であっても、学習指導要領(の改訂)や中央教育審議会答申等に依拠しつつ、カリキュラム論的もしくは学校経営的な充実化をはかる内容が主であるといつてよい。

これらの研究は、たしかに道德教育の充実・強化をめぐる要請の必然性が理解された結果であるにしても、学校教育システムの変化に伴う教員の多忙化や教科的学力を重視する傾向の社会的な強まりといった、道德の時間を実施するうえで考慮に入れざるをえない現在の諸状況を踏まえたものであるとはいいがたい。従来の諸研究は、こうしたリアルな状況に向き合って道德教育を充実させようとするには、あまりに教員個人や各授業の個別的な対応に任されすぎていたとさえいえるかもしれない。

- (3) 附中の校内LANは、秋田大学の「情報セキュリティポリシー」(平成16年6月24日)に基づき、万全の情報セキュリティ対策を施した上で運用されている。
- (4) 学校の実態により踏み込んでいえば、学校行事等との関連から、道德の時間には週1時間・年間35時間すら確保されない状況が発生することもある。

りうる。

- (5) もうひとつの柱は、ヘルバルト (Herbart 1806) が描き出したような「(一般) 教育学 (pedagogy; Padagogik)」の試みである。個別的な教育活動の背後にある (べき) 原理を自覚的かつ理論的に問い直す枠組みがなければ、教育学はやはり「技術論」(Kant 1803) の域を出ないことになる。
- (6) 校内のこのような活動は結果的に、今日の学校教師文化において課題となっている「同僚性」を高めることにも寄与するはずである。附中の取り組みの場合でも、本稿 3. (1)・①に述べたように、ポジティブな効果が現れていることが確認できる。

### 【引用参考文献一覧】

- Comenius, J. A. (1633-38) = コメニウス『大教授学』1, 明治図書出版, 鈴木秀勇訳, 1962年
- Herbart, J. F. (1806) = ヘルバルト『一般教育学』玉川大学出版部, 是常正美訳, 1968年
- 『ひと』編集委員会編 (1989)『「教育技術の法則化運動」症候群』太郎次郎社
- 海後宗臣・清水幾太郎編 (1966)『資料・戦後二十年史 5 教育・社会』日本評論社
- Kant, I. (1803) = カント「教育学」『人間学・教育学』玉川大学出版部, 三井善止訳, 311-390
- 文部科学省 (2010)「教育の情報化に関する手引」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm)
- 向山洋一 (1999)『教育技術の必要性 教え方のプロ・向山洋一全集 10』明治図書出版
- 村井 実 (1967/1990)『道徳は教えられるか』国土社
- 永田繁雄・島恒生 (2010)『道徳教育推進教師の役割と実際－心を育てる学校教育の活性化のために』教育出版
- 内閣官房・IT戦略本部 (2001)「e-Japan 重点計画－高度情報通信ネットワーク社会の形成に関する重点計画」<http://www.kantei.go.jp/jp/it/network/dai3/3siryou40.html>

- 岡崎 勝・土井俊介・山本鉄幹 (1988)『不能化する教師たち－教育技術・法則化症候群』風媒社
- 押谷由夫・本田正道・尾高正浩 (2010)『道徳で学校・学級を変える－実践事例から学ぶ 新しい道徳教育の展開 小学校』日本文教出版
- 柴田義松 (2010)『柴田義松教育著作集 6 授業の原理』学文社
- 宇佐美寛 (1987)『道徳教育』日本放送出版協会

### Summary

This paper examines cases of efforts made on the rationalization of the Class Moral Education planning and implementation at the Junior High School Attached to Akita University Faculty of Education and Human Studies.

The Junior high school works on accumulation and the sharing of various materials gained through The Class Moral Education practice in school by making good use of schoolwide LAN with teachers of the Moral Department playing central roles.

And, the enhancement of a further improvement in the classes Moral Education as a whole school by these efforts is, as a result, also going to lead to the reduction in the load of each teacher's involvement in class.

A policy for technical/methodological rationalization for constructing the Class Moral Education in the current schools is to be discovered from these characteristic efforts made by the Junior high school.

**Key Words :** The Class Moral Education, Moral Education, Improvement of the Class Moral Education, Rational class planning and implementation, Schoolwide LAN

(Received February 15, 2011)